

アンドレア・サッキ作《三人のマグダラのマリア》
—有馬の殉教者マグダレナ林田の表象をめぐって—

楠根圭子（武蔵野美術大学）

17世紀イタリアの画家アンドレア・サッキが制作した《三人のマグダラのマリア》（サン・サルヴィ修道院所有、ウフィツィ美術館に寄託）は、きわめて稀な主題を扱った絵画である。ベッローリのサッキ伝によれば、描かれているのはマグダラのマリア、マリア・マッダレーナ・デ・パッツィ、そして「インド（東洋）もしくは中国の女王」で殉教者とされる、マグダラのマリアの名を持つ女性である。この三人目の女性が誰であるかという問題については、現在まで十分な研究がなされてきたとは言えない。

本作の制作年代は、18世紀のリカの文献にもとづき、1632-33年頃とみなすのが定説となっている。教皇ウルバヌス8世がフィレンツェのカルメル会修道院のために注文した作品で、画中の東洋人の女性が「日本の殉教者マグダラのマリア」である可能性が高い。この女性の聖遺物も同修道院に送られたものとみられる。

近年ディ・モンテは、この女性が1613年に日本の有馬で殉教した「マグダレナ林田」である可能性が高いことを指摘した。彼女の殉教については、イエズス会士ヴィエイラの年報をはじめ多くの報告が残されており、それらによれば彼女は火刑に処される中で燃えさかる薪を手にとってそれを頭上に掲げ、キリストへの崇敬と信心を示したとされている。この記述は本作や、その準備素描に見られる女性像の表現に一致する。

本発表においてはディ・モンテの主張を支持しつつ、それを裏付けるために17世紀中ごろまでの日本の殉教者に関する史料等を精査し、より詳細な検討を行う。マグダレナという洗礼名の日本の殉教者は数多いが、サッキの作品の図像に合致する人物はマグダレナ林田とみてほぼ間違いないと思われる。当時の文献は彼女が燃える薪を冠のように頭に載せたと表現しており、本作の女性像の戴く光の冠はこのことを象徴的に示しているものであろう。

1620年代前半には、マグダレナ林田の遺骨をヨーロッパへ送る計画があった。また、前述のヴィエイラは1626年にローマに赴き、ウルバヌス8世に有馬のキリシタンからの奉答書を渡している。さらにロペ・デ・ベータは、日本の殉教者について書いた1618年の著作の中でマグダレナ林田を大きく扱っている。以上のことから、教皇はこの有名な殉教者の存在に注目し、サッキに本作を注文したと考えられる。

マグダレナ林田の図像の先行例として挙げられるのは、サデレルやヴァン・ロションの版画作品である。その他、当時の著作物の中で彼女が古代ローマの貞婦ポルキアに例えられていることから、その図像がサッキの絵画作品の一部に取り入れられた可能性がある。夫ブルートゥスの後を追うため燃えさかる炭を飲み込んで自殺したとされるポルキアは、その死に方においてマグダレナ林田との類似性をもつ人物であり、サッキはヨーロッパ絵画の伝統的手法を用いつつ当代の異国の殉教者を描いたと推測されるのである。